

第 75 回 山口西田読書会 (2015 年 5 月 16 日)

前回 (2015 年 5 月 9 日) のプロトコル (来栖)

出席者：佐野、山口、山本、岡田、岡部、植田、千葉、来栖

テキスト：西田幾多郎『善の研究』第 2 編第 10 章「実在としての神」第 1 段落

注：「後記」は発表の後で来栖が付加したもの。

0、冒頭で、このところプロトコルに時間をとられてテキストが進まないの、哲学的問いを含め 14 時半にはプロトコルを終わり、また哲学的問いは一つだけにするとされた。

1、次いで植田氏のプロトコルについて議論された。

1-1、「1-③ 西田における (学問、芸術、道徳に対する) 宗教の優位性」(1 頁) について、これは山口時代から一貫して変わらないとともに、『善の研究』では) これらの極意は一つであるということも西田に見出されることを佐野先生が確認された。

1-2、今の学生は宗教に拒否感を持っており、宗教の意味づけが必要だという声が挙がった。そもそも宗教学が西洋で 19 世紀半ばに生じたのは、ユダヤ・キリスト的伝統に立つ文化圏の宗教も同じ宗教として認めようという動きが生じ、その際神がその中心概念を占めない仏教を同じ宗教として認めようとすれば、もはや宗教を神という言葉を使って定義できなくなるので、改めて宗教を定義し直す必要が生じたためだという声があった。これに関連し、「純粹経験に関する断章」の中の「断片 22」において、仏教は無神論であり、無我説だとして西田は定義し、ここに罪の概念はないが、浄土宗、真言宗は有神論に傾くと述べていることを佐野先生が指摘された。ただし浄土真宗でも阿弥陀はあくまでも方便だという声があった。

1-3、「1-④ 主客合一について」(2 頁) における「純粹経験は人によって違うと思う」という前々回の岡田氏のテーゼについて議論された。

(前々回岡田氏は、(1) 人それぞれ (主観的) である、考究の出立点としての純粹経験、(2) 宇宙の真理 (万人に共通の、自然科学的アプローチの対象としての真理) に合一するときの純粹経験、を区別された。後者が神人合一に相当すると岡田氏は考えておられたようであるが、果たしてそうかという問いが残ることを佐野先生が指摘された。)

例えば同じ音楽を同じとき同じ場所で聞いても、ある人にはそれが純粹経験となりうる

が、他の人にはそうではないことがありうるように、純粹経験の内容は人それぞれで差異はあるが、純粹経験そのものは万人に共通のものだと西田は考えているのではないか、という声があった。それに対し、それでは「個人あって経験あるに非ず、経験あって個人あるのである」という『善の研究』の「序」のテーゼに反するという声があった。それに対し、この西田のテーゼはそもそも主客の分離がどこから生じるのかという問題に対するものであるが、先の例は主客が分裂したときのことを念頭に置かれたものだと答えられた。

2、植田氏の「2 哲学的問い」は物心の独立的存在を否定する西田に対する岡田氏のアンチテーゼに関わるものであったため、岡田氏が来られてから扱うことにされ（この時点で岡田氏はまだ来ておられなかった）、『善の研究』第2編第10章「実在としての神」の第一段落にもう一度入った。

2-1、第1段落の最後の一文の中に、神について、(1)「実在の根本」（純粹経験の統一力）、(2) 純粹経験そのもの（「主客の区別を没し、精神と自然を合一したもの」）、という二つの意味が現れていることが指摘された。

2-2、最近の（特に若い）宗教嫌いの人々からすれば、西田は初めから神を前提にしている（西田教を書いている）という反論が出てきうるという声があった。これに対し、西田からすれば無理に神という言葉を使わず、統一力という言葉に留めておいてもよかったのだが、西田の立場から（おそらくはユダヤ・キリスト教的伝統が念頭に置かれているのであろうが）いわゆる神を説明すれば、統一力の概念に対応することを示そうとしたのだという声があった。これに対する反論はないか佐野先生が諮られたが、特に異論はなかった。

2-3、次いで第1段落の「注」の前半を読んだ。

（要約）いずれの時代や人民にも神という言葉を持たぬ者はないが、その意義は多様である。多くの宗教家が持っているような、宇宙の外に立ってそれを支配する偉大な人間のよような神の表象は、今日の学問知識と衝突し、また神と人間の内心の一致を説明できぬ。

佐野先生が以下のような解説をされた。『善の研究』の1から2年前の時点では、神と人との関係を父子関係で捉えるのは不十分であり、本体と部分の関係であると西田は考えている。（本当の）キリスト教でもヨハネ（福音書）に至ると父子関係ではない。「仏教は自ら悟る也。釈迦は神の子に非ず。」

なぜ（西田において）統一力が言えるのかという問いを佐野先生が出され、神はどこに

あるのか、(西田のいう)統一力を受け入れると西田教になる、(統一力の理論は)アインシュタインが最後まで求めた統一場理論につながる、といった声があった。

3、ここで岡田氏が来られ、植田氏のプロトコルの「2 哲学的問い」で挙げられた「① 客観に相当するモノは確かに存在しているのではないだろうか」という岡田氏の問いについて白熱した議論がなされた。岡田氏はまず以下のように言われた。

西田は見神の事実(注:2-10-4注を参照)に基づいて神が存在することを述べており、これ以上のことは言っていない(注:これに対し佐野先生があとで反論された)が、それならば「机がある」ことは「机を見た」ことに基づくことになる(注:これに対し、植田氏もプロトコルで同じことを言っていると佐野先生が言われた)。「あるから見える」「見えるからある」は相互作用であり、この両方がなければならない。主観も客観も(それぞれが独立に)存在する。

3-1、この場合の「見る」ことについて、それは感じるのかという問いがあり、佐野先生が肯定された。そうだとすれば、(神を見ているときにはその)感覚だけに基づくのではなく、神が見ているという感じ(注:主観と客観の相互作用)があるという声があった。

3-2、(生物ではなく)生命は見えないが、生命と原子はどっちが先かと佐野先生が問われ、それらは一体であり、生命は見ることができると岡田氏が言われた。それは科学を前提にしていないかと佐野先生が言われ、その時は科学を含め総合的に見るのだ、より深い理解のためには分別を総動員せねばならない、と岡田氏が言われた。

生命が見えていても、それは感覚に基づくのではないと佐野先生が言われた。「神を見たからある」が成り立つのであれば、「命を感じたからある」も成り立たねばならないと岡田氏が言われた。『善の研究』の「序」の「個人あって経験あるにあらず」という言葉を引き合いに、西田は経験を個人から離れたものとし、そこにまだ個人はないが、モノの発見も自分から離れたところで降ってわくのだと岡田氏が言われた。

3-3、「あるから見える」「見えるからある」の相互作用を判断しているあなたはどこにいるのだ、という(岡田氏への)問いがあった。

3-4、西田は神を宇宙の根本や統一力というモヤモヤしたものそのままにしており、みんなが見ている神は(西田の言う)統一力かどうかはわからぬと岡田氏が言われた。これに対し、(岡田氏は)見神の事実を重く受け止めすぎているという声があった(西田の言う見神の事実は、論理的帰結としての統一力の概念の補足にすぎぬ)。

3-5、神が（それを見ることで）検証できるのであれば、机もそれを見ることで検証できねばならない、錯覚もあるというのであれば神が錯覚であることも認めねばならない、と岡田氏が言われた。それに対し、あると判断しているのも主観だという声があった。

3-6、神の話を外し、机があるかないかをそれだけで議論できないか、と佐野先生が言われた。今この机があると確信していると岡田氏が言われた。しかしそれは「自分（主観）が」と感じているのであり、錯覚もその人には真実だという声があった。（「ぐるぐる回りだ！」という声がかかった。）

3-7、物（例えばこの机）の本体は動物が見れば人間が見るのとは違って見えうるが、客観とは何か、真理の意味は何か、という問いを佐野先生が出された。これに対し、モノ・客観は私と独立にあり、（その）認識は感覚と別にはできない、我から独立に月があるから（我はそれを）見ているのであり、（その）丸い形も真実の一端だと岡田氏が言われた。客観は物の真実の姿におけるものかと佐野先生が問われ、岡田氏は肯定された。これと科学は接近していくのだそうである。

これに関し、佐野先生が西田の学問の分類を紹介された。すなわち、

(1) 説明的学問（科学）：これはいかに **How?** を外から説明する。(2) 規範的学問：これは外からは説明できない目的や価値を扱う。（ここで時間切れとなった。）

4、哲学的問い：物心（主客）の独立的存在についての3の議論について：

議論がかみ合っているとは思えなかったが、「この眼前の机が主観の意識から独立にそれだけで存在している」という岡田氏のテーゼは、『善の研究』第2編「實在」第1章「考究の出立点」第2段落の注におけるバークリ流の観念論的論拠による物心の独立的存在の論駁に実は主客の分裂が前提にされている、すなわち物心の独立的存在こそが純粹経験がもはや疑うにも疑いえない直接の知識であるよりも根本的に疑うにも疑いえない直接の知識である、という前々回の岡田氏の指摘を考えれば説得力を持つ。すなわち物心の独立的存在は、それに基づいて純粹経験の概念が可能となっている原信憑 *Urdoxa*（岡田氏の言う確信）なのである。まさにこのような反論が成り立ちうるところに『善の研究』第2編における純粹経験論の欠陥を見ることができないであろうか。

（後記：西田の純粹経験の立場は主観を残すバークリの観念論ではないという主旨のことを佐野先生が言われた。最終的には確かにそうであるが、『善の研究』第2編第1章第2段落の「注」の前半の論拠はバークリの『人知原理論』本編第1節と第3節に見られるものである。同所でこれに心理学的論拠を付加することで西田は物と心の実体的な合一を根

拠づけるのである。これについては拙稿「西田幾多郎『善の研究』における純粹経験について」（「山口大学哲学研究 第16巻」、2009年）13-14頁を参照。岡田氏の論点はいくまでも物心の独立的存在の肯定ということだったので、これを論駁するためにまず西田が持ち出したバークリの観念論的議論に絞って話をした次第である。観念論は主観を残す点では西田の立場とは異なるが、主客の独立存在を否定する点では西田と共通しているからである。）

ただし同じことが同書第1篇の純粹経験論にもあてはまるかどうかは問題となりうる。心理主義的議論になる恐れを避けずに言えば、例えば明暗の別すらさだかならざる混沌たる統一である初生児の意識（1-1-4）において物心の独立的存在が確信されているであろうか。物心の独立的存在の我々の確信はいかなる時点で生じたのであろうか。言葉を覚え、分別を獲得した時点でであろうか。（西田の立場からすればこうなりそうだが、言葉も分別も持たない動物も主観と客観の分離を何らかの仕方で意識してはいないであろうか。）

（後記）佐野先生が西田の純粹経験論をまとめられた。まず純粹経験があり、ここから我々が判断し、自我が生じ、客が生じる。判断は客体を統一する働きであり、これが自覚である。これが訓練されると純粹経験に帰る。モノが主観から独立の存在することも経験を統一する中で行われる。なぜなら、モノが主観から独立に存在すると考えた方が整合的だからである。（後ろを振り向いて前を振り返れば、いつでも机がある。岡田氏の言う「見えるからある、あるから見える」。）これが常識的立場であり、例えば「次の瞬間に床がない」と考えると歩くことができぬ。（ただし昨日までの妻の愛が今日には失われるということはある。）

さらに、純粹経験から出発するとはそういうことか、そもそも純粹経験があるとはどういうことか、「あれは純粹経験であった」とどうして言えるのか、ここには人間の願いが入っていないか、それとも純粹経験を見たのか、それとも純粹経験は論理的要請か、という問いを佐野先生が出された。